

厚見恵一郎『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』について

——摘要と若干の指摘——

村田 玲*

厚見恵一郎氏の処女作『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』(2007年)⁽¹⁾は、1993年以降、主として『早稲田政治公法研究』、『早稲田社会科学研究』、『早稲田社会科学総合研究』に掲載された諸論稿にもとづき執筆された同氏の博士論文「マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と『歴史の政治学』」(2005年)に、「大幅な加筆、削除、修正」(435頁)が施されて成立した著作である。しかるに表題の近似からも窺われるとおり、その構造、論旨に関しては博士論文から大幅に隔たるものではない。したがって本稿は、概ね推理可能な著作の成立過程に着目しつつ摘要を行い、若干の指摘を寄せる。

1. 摘 要

『拡大的共和国』全四部十章の論述構成の概略は、既に厚見氏の論稿「マキアヴェリ——共和主義・国家理性・歴史」(1995年)⁽²⁾において素描されており、極めて一貫した研究計画の完遂を窺わせる。1995年の論稿中の第1節「現実主義」は、イタリア・ルネサンス期における「目的論的な階層秩序観」の崩壊、およびその帰結としての不断の流転と闘争を反映する世界観の形成を概説している。第2節「歴史叙述と共和主義」は、「教訓の宝庫」と解された「歴史」を媒介することにより、マキアヴェッリの依拠する「秩序づけの論理」としての「共和主義の論理」の確保が可能となった旨を主張している。第3節「国家理性」に至り、古典古代の伝統とマキアヴェッリ政

治思想との相違点が検討される。現代におけるマキアヴェッリ研究の主要な2系統(21頁, 428頁), すなわち一方におけるレオ・シュトラウス, ハーヴェイ・マンズフィールドに連なる系統と, 他方におけるクエンティン・スキナー, ジョン・ポーコック, マウリツィオ・ヴィローリに連なる系統各々の研究成果が十全なる咀嚼をみることに, 第1節が『拡大的共和国』の第1部「マキアヴェッリのコスモス」に, 第2節が同第2部「マキアヴェッリと歴史叙述の伝統」および第3部「マキアヴェッリと共和主義」へと, そして第3節が同第4部「統治術としての政治学」に結実したものと推察される。

1.1. 世界の「状況化」と「政治的現実主義」

論稿「N・マキアヴェリ」の政治思想(上)——序説(『早稲田政治公法研究』第42号, 1993年)において, 厚見氏は現代における3名のマキアヴェッリ解釈者, すなわちシュトラウス, ポーコック, および佐々木毅を列举しつつ, 伝統的解釈者らに対するこれらの優越を主張した。伝統的解釈者らが, 主としてマキアヴェッリにおける「人間観」の転換に留意しつつ立論を展開していたのに対し, 3名の解釈者は「人間観」のみならず, これを包摂する「世界観・宇宙観」の転換に適切な注意を払っていた。イタリア・ルネサンス期における「世界像」の改変, すなわち「中世的普遍秩序の動揺」とその諸々の帰結に関する理解が, マキアヴェッリ政治思想の「特殊近代的な独創性の把握」に先行せねばならないというのである。それゆえに厚見氏は, 論稿「中世秩序理念の解体と政治的現実主義(上)(下)——マキアヴェリと政治の秩序(一)(二)」(『早稲田社会科学研究

* 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程

究』第47号, 第48号, 1993~1994年)中, まずもって「中世トミズムの階層秩序」の解体について概説したのであった。とりわけアンソニー・パレル『マキアヴェッリアン・コスモス』(1992年)⁽³⁾に依拠した論述の精緻化を経てはいるものの, 同論稿の論述内容は『拡大的共和国』第1部第1章に概ね対応している。第1部第1章の論述によれば, 既にルネサンス期における占星術的・魔術的秩序観によって準備されていたマキアヴェッリの「世界観」は, 「現実の状況化」によって特徴づけられたものであった。「状況化」とは, 「事実が人間にとって外的, 変動的, 個別的なものとなり, 包括的原理……によっては秩序づけられることができず, 人間による個別的対応を要請するものとなったことを示す, 象徴的表現」である(33頁, 84頁)。「力による暫定的均衡」を企図する「政治的現実主義」は, かかる「世界観」が政治の言語に翻訳された際に生じるのである。「政治的現実主義」は, 「不断の運動と拡大闘争」に帰着する世界の「状況化」を心身に反映した人間像, すなわち「政治的人間」を想定する。かくして論稿「現実主義と政治的人間(上)(下)——マキアヴェリと政治の秩序(三)(四)」(『早稲田社会科学研究』第49号, 第50号, 1994~1995年)の論述内容に概ね対応する『拡大的共和国』第1部第2章は, かかる「政治的人間」の性格描写にあてられたのである。

ここにおいて, 『拡大的共和国』中に頻出する「状況化」なる言辭が, 佐々木毅『マキアヴェッリの政治思想』(1970年)においても頻繁に用いられる事実は注目されるべきであるだろう。すなわち第1部における厚見氏の論述は, 「世俗化」による「コスモロジーの融解」からマキアヴェッリの「感性的人間論」を説明する『マキアヴェッリの政治思想』冒頭部分の論述と近似の軌跡を描いていることは疑いなく, 諸々の看過すべからざる相違点にもかかわらず, 同先行研究の深甚なる影響を推察させる。佐々木氏は, マキアヴェッリの「選択と投企とを最も端的に提示したもの」としての「原理的認識」と, 「一定の条件下で如何なる行動を行なうか, という設問への回答」としての「状況的認識」とを区別したのちに(佐々木, 12頁), まずもって前者へと焦点を据えるのであり, 『君主論』および『リウィウス論』以下の諸

論述を専ら後者に解消する解釈の系統を否定している。「政治という人間の営みについての原理的把握」はひとつの「哲学」を前提とするがゆえに, マキアヴェッリはひとりの「哲学者」と解されるべきであるというのである。佐々木氏によるならば「マキアヴェッリの哲学」は, ルネサンス期における「世界観」の重大案件をなした「fortunaとvirtùについての議論」と, この「哲学」に比類なき独創性を付与した「欲望自然主義の人間像」より構成されるものであった。『拡大的共和国』は, 『マキアヴェッリの政治思想』における「原理的認識」と「状況的認識」との区別を継承し(27頁), 「原理的認識」の中枢をなすものと認識される「人間像」の輪郭をも継承する。厚見氏もまた, レオ・シュトラウス『マキアヴェッリ論考』(1958年)⁽⁴⁾の立論を踏襲しつつ, フィレンツェ共和国元書記官を「哲学者」とみなす根本前提を明らかに共有しているのであり, それゆえに「統一的マキアヴェッリ像構築」の可能性に懐疑を表明した先行諸解釈を峻拒するのである(17頁)。

1.2. 「教訓の宝庫」としての「歴史」

しかしながら『拡大的共和国』第2部に至り, マキアヴェッリがルネサンスの歴史叙述の伝統に位置づけられるに際して, 厚見氏の論述と佐々木毅『マキアヴェッリの政治思想』との対立軸が明示される。『マキアヴェッリの政治思想』によるならば, 「状況化」した世界における「感性的人間」の個人主義と私益追求は, 「より大きな力」による「秩序らしさ」形成の論理, すなわち「statoの論理」を要求する。あくまでマキアヴェッリ政治思想の本旨は「ティラニーの論理」と同一視される「statoの論理」に存するがゆえに(佐々木, 97-98頁), 『リウィウス論』における「共和国論」は, その「軍事論」とともに(同, 135-137頁), 「感性的人間論」との齟齬が生じたことによる「アポリア」に直面し, 「遂に挫折」せねばならなかったという(同, 173-174頁)。かくして佐々木氏は, マキアヴェッリの「政治観」を要約して, 「stato的論理の優位の下に, 『共和国』論をそのsub-systemに取り込んでいる」と総括することになったのである(同, 197頁)⁽⁵⁾。『拡大的共和国』がマキアヴェッリにおけ

る「歴史叙述」と「政治倫理」との連関を注視せずにはいなかったのは、以上の佐々木氏の立論に対する反駁を意図したことによるものと推察される。あるいは厚見氏の反駁に、『マキアヴェッリの政治思想』とほぼ時を同じくして公刊された研究書、柴山英一『マキアヴェッリの歴史的研究序説』（1969年）の論述を相対的に評価しつつ、佐々木氏の主張に対する批判的立場を明示した藤原保信「マキアヴェッリ」の薫陶の痕跡を看取することも困難ではあるまい⁽⁶⁾。

厚見氏はレオ・シュトラウス『ホッブズの政治学』（1936年）中の論述を敷衍しつつ⁽⁷⁾、ルネサンス期における循環史観の受容を通じ、「歴史」が「人間に実践的分別と具体的処方箋を与える唯一の手段、すなわち教訓の宝庫」として機能していたことに注意を喚起している（186-192頁）。「現実を秩序づける方法としてマキアヴェッリが選ぶのは、古代ローマ共和政を歴史的模範として掲げる方法であった」（190頁）。かくして「歴史」を媒介とする「秩序づけの論理」と「共和主義の論理」の結合が達せられることにより、マキアヴェッリ政治思想において「政治と徳」の連結が維持されていた旨を主張した『拡大的共和国』第2部第4節は、同著作前半部分の論述の頂点をなすものと思われる。論述順序において先行し、マキアヴェッリ前史をなすルネサンス期の「歴史叙述の伝統」を概括した第2部第3章に対応する論稿「マキアヴェッリと修辞術の伝統」（『早稲田社会科学総合研究』第3巻第3号、2003年）および「マキアヴェッリと実践的歴史叙述の系譜——政治と歴史の関係をめぐる一考察」（同第4巻第1号、2003年）が、第2部第4章に対応する論稿「政治と秩序をつなぐもの（上）——マキアヴェッリと政治の秩序（五）」（『早稲田社会科学総合研究』第51号、1995年）に比して、時間的に大幅に後続していたことは注目に値する。「歴史」を「マキアヴェッリ政治思想の本質的契機」とみなす立場が、既に先述の1993年の「N・マキアヴェッリの政治思想（上）」において明確に表明されていることに鑑みるならば、「歴史解釈の政治学」なる主題こそが、『拡大的共和国』中に考察に付される膨大な問題群の最古層に位置していることが窺い知れるのである。「目的論的な階層秩序」の崩壊と「現実の状況化」を秩序づける方法とし

て、「歴史」がマキアヴェッリによって採用された旨を論証し、ついで「歴史解釈」を通じて構成された「マキアヴェッリのローマ〔共和政〕」の諸性格を分節化したのち、ここに確かに含まれる「近代性」の兆候を把握せんとする論述計画は、十余年の厚見氏の研究履歴の最初期に設定されていたものと推察される。浩瀚なる『拡大的共和国』の論述を特徴づける非常な網羅的性格と整然たる理路との共存は、かかる計画の貫徹をもって成功裡に達せられたものであるだろう。

1.3. マキアヴェッリ共和主義の二重の性格

かくしてマキアヴェッリが「歴史解釈の伝統」に位置づけられたことをうけて、第3部はここに至り重大案件として浮上する「歴史解釈の政治学の規範内容としての共和主義」（48頁）の分析にあてられる。第3部第5章は、マキアヴェッリの前史をなした初期ルネサンスにおけるコルッチオ・サルターティおよびレオナルド・ブルーニらの「政治的人文主義」（civic humanism）を概説する。つづく第3部第6章は、『リウィウス論』において再構成された「マキアヴェッリのローマ〔共和政〕」の諸性格を、主として伝統的共和主義との親近性に焦点を据えつつ論述している。第3部第7章に至り、「マキアヴェッリのローマ」における「近代性」の萌芽をなす側面が析出され、マキアヴェッリ政治思想における「統治術」の要素を論ずる第4部が準備される。『拡大的共和国』に先立って執筆された厚見氏の諸論稿のうち、「マキアヴェッリにおける政体の設立と選択——マキアヴェッリの歴史的國家理論（1）」（『早稲田社会科学総合研究』第54号、1997年）、「マキアヴェッリ共和主義の再検討——マキアヴェッリの歴史的國家理論（2）」（『早稲田社会科学総合研究』第55号、1997年）、「フィレンツェ人文主義と共和主義——サルターティからブルーニへ」（『早稲田社会科学総合研究』第4巻第3号、2004年）、「マキアヴェッリはどこまで古典的共和主義者か——ローマ史と内紛の解釈をめぐって」（『早稲田社会科学総合研究』第5巻第1号、2004年）各々の随所が断片的に組み込まれているものの、第3部の全体像は厚見氏の共和主義研究の一定程度の進捗ののち、はじめて統一的編成を与えられたものと推察される。

厚見氏によるならば、循環史観および「歴史叙述の伝統」の継受は、「マキアヴェッリのローマ」に看過すべからざる伝統的性格を刻印せずにはいなかった。「マキアヴェッリの共和主義が伝統的共和主義の延長線上に語られうる理由は、自由(libertà)・共通善(bene comune)・公民的偉大さ(gloria)の3者を近接した概念とみる伝統的な枠組みを……維持しているから……」(271頁)。しかるにマキアヴェッリの思惟は、古代的・中世的思惟を規定した「目的論的な階層秩序観」の倒壊を前提とするものであったはずである。「外的自然法則の必然性」に基礎づけられたポリビオスの循環論が、マキアヴェッリにおいては「人間の野心による興亡」から導出されていることが銘記されるべきである(209頁)。静態的秩序の自明性が喪失され、ただ間断なき流転と闘争に相対的均衡を建立する可能性のみを追求せしめる「現実の状況化」は、政体循環の摂理に抗うべく構想された共和政体、すなわち「混合政体」に対しても根本的変態を要求する。かくして厚見氏は、とりわけ『リウィウス論』第1巻第6章に着目しつつ、マキアヴェッリの共和主義のみならず、その政治思想全体の「近代性」を、「状況化」に起因する「〔近代の〕必然性」の見地から説明し、これをもって自身のマキアヴェッリ解釈の要諦とするのである。「〔近代の〕必然性」とは、「〈外敵の侵攻を前提に軍事外交を内政よりも優先させ、傭兵に依存せず、移民の流入を認めることなどで自国の平民の数を増大させながら、その平民を武装させることで、防衛のみならず拡大を達成してゆく政策をとらなければ、国家は滅びてしまう〉という『必然性』を意味する」(294頁)。厚見氏は、「マキアヴェッリのローマ」にとっての「参加」が見紛う方なき「動員」の要素を含有する旨を強調し、その共和主義における「〔近代的な〕統治的主権」の契機を指摘するのである(317頁)。「君主論」の名宛人は「現実の君主」であり、『リウィウス論』の名宛人は「潜在的君主」たる2名の「貴族」であった(315-316頁)。したがって『君主論』のみならず『リウィウス論』もまた、共和政体において「平民」を「動員」すべき「君主たち」に宛てられた「統治術」の側面を有することが見落とされてはならないというのである。かくして「マキアヴェッリのローマ」の「近

代性」を測る指標として、「民主的参加よりもむしろ帝國的拡大の志向性の強度」、さらには「権力的・統治的要素」の混入の程度を採用するに至った『拡大的共和国』第3部第7章が、同著作前段第1部および第2部と後段第3部および第4部を架橋し、立論全体に一貫性を付与する結節点であることは疑いなく、厚見氏のマキアヴェッリ論の到達圏を示す枢要部分であると推定される。というのも、マキアヴェッリ共和主義が帯びる「〔帝國的〕拡大的性格」を「近代性」の兆候とみなす立場は、博士論文に先立つ厚見氏の研究履歴中、最終段階に属す2004年の「マキアヴェッリはどこまで古典的共和主義者か」に至り初出するのである。近代における「マキアヴェッリ的なもの」に関する洞察の深化にともない、「拡大的共和国」なる疑問符が漸次重大性を増し、ついには著作表題として冠されるに至ったものと推察される。

1.4. 非自然的・歴史的公共体の「統治術」

イタリア・ルネサンス期における「現実の状況化」は、「普遍的自然」に依拠した秩序観を遠景に退かせたものの、マキアヴェッリをして「共通善をまったく喪失した私益実力の貫徹」(346頁)としての「ティラニーの論理」(佐々木)に傾倒せしめたわけではなかった。「歴史解釈」を通じ再構成されたローマ共和政を規範として機能させることにより、確かにマキアヴェッリは「国家を公共体としてみるレス・プブリカの観点」(328頁)を堅持していたのである。しかるに、この「自然的」ならざる「歴史的公共体」は、自足の可能性を否定する「近代の必然性」に直面し、ひとつの利己的統治権力として「動員」を強化しつつ、生存を賭した対外的拡大闘争に乗り出さねばならない。かかるマキアヴェッリ政治思想の根底に宿る両義的性格を、厚見氏は「imperium〔支配権・命令権〕」と「ordini〔秩序・公的制度〕」の2概念間の往復運動として説明している。すなわち『状況』を最初に秩序づける緊急枠組の論理」としての「imperium」と「その枠組を持続するための共和主義的・公民的徳の論理」としての「ordini」の相関こそが、「マキアヴェッリの思想的中心」であるというのである(322頁)。「『拡大的共和国』の根本命題は、「〔マキアヴェッ

リ政治学は] ordini と imperium の共存拡大のための歴史的 arte [である]」と総括される (36 頁, 322 頁)。同著作第 3 部の要諦は, 「imperium すなわち統治術」の要素の突出に, マキアヴェッリ政治思想の「近代性」を見出すことに存していたのであった。それゆえ最終第 4 部は、『君主論』およびその他主要諸著作に看取される「統治術」の側面の分析にあてられる。第 4 部第 8 章が, 1997 年の論稿「マキアヴェッリにおける政体の設立と選択」の論述内容を部分的に踏襲しているものの, 同第 9 章および第 10 章の論述内容に関しては, 博士論文に先行した厚見氏の諸論稿中に該当する箇所は存在せず, 第 3 部全体の構想が確定したのちに執筆された部分であると推定される。

第 4 部において, 「主著四著作」に属す『君主論』, 『リウィウス論』, 『戦術論』各々における「imperium」の要素が抽出され, 主題的に論じられていることから窺われるように, 厚見氏は, マキアヴェッリの「すべての著作」のうちに「imperium」と「ordini」の二要素の混在が見出されるものと想定している (350 頁)。『君主論』のうちに「imperium」の優越を, 『リウィウス論』のうちに「ordini」の優越をみとめるにとどまるのである (36 頁)。ここにおいて, 厚見氏によって極めて高く評価されるシュトラウスの『マキアヴェッリ論考』が, 『君主論』および『リウィウス論』の間に何らかの従属関係をみる「斯界のオーソリティ」⁽⁸⁾に異論をとなえていた事実を想起しうるのかもしれない。幾多の偉大な先行諸研究と同様に『拡大的共和国』もまた, 過去 5 世紀のマキアヴェッリ解釈史上に百家争鳴の事態を現出せしめた問題, すなわち「『君主論』/『リウィウス論』問題」に独自の解答を与えるものであった。

2. 若干の指摘

『拡大的共和国』において, 厚見氏はマキアヴェッリ共和主義の「近代性」の程度を査定するにあたり, その「統治的・権力的要素」の混入の程度をもってする所説を明示した。「統治的・権力的要素」は, 自足を不可能ならしめる「近代の必

然性」, すなわち「〔帝國的〕拡大」と「動員」の特殊近代的な「必要性」ゆえに共和主義思想へ流入したものと説明されている。ここから同著作「序論」における厚見氏の「近代的=拡大的共和国論」なる表現 (20 頁) が生じたものと思われる。しかしながら学会報告「君主の位置と統治理性——マキアヴェッリ stato 論の『文脈』再考」(2007 年政治思想学会第 14 回研究会) において厚見氏も示唆するように, 近代における「集権的国内統治の契機」を「帝國的拡大 (拡散) の契機」と無条件に結びつけることは困難であると思われる。厚見氏は「『マキアヴェッリにおいて開始された近代的な stato 概念が, ホッブズにおいて完成され, 絶対主義時代における主権国家システム成立の基盤となることで, 帝國的拡大の政治思想は背景に退いた』という一般的な理解」を「大枠として正しいかもしれない」ものとして承認するのみならず, マキアヴェッリにおける「拡大を志向する帝国の要素」の「残存」についてすら語るのである (学会報告原稿, 1 頁)。「『主権国家システム』成立以前に, 『集権的国内統治の要請』と『帝國的拡大の希求』とが混在しないし両立していた『マキアヴェッリ』という可能性」(同, 2 頁)のうち, あえて厚見氏が後者を重視し, さらに「近代的」と「拡大的」とを等号で連結したことの真意は必ずしも明らかではないのである。

2.1. 「マキアヴェッリ・テーゼ」について

既述のごとく, マキアヴェッリ政治思想から汲み取りうる 2 つの「契機」, すなわち「集権的国内統治の契機」と「帝國的拡大の契機」のうち後者の論点は, 博士論文に先立つ十余年の厚見氏の研究履歴の後半段階で主題的地位を獲得したものと推察される。しかるに「マキアヴェッリの思想的中心」を「『状況』を最初に秩序づける緊急枠組みの論理」としての「imperium」と, 「その枠組みを持続するための共和主義的・公民的徳の論理」としての「ordini」との 2 概念間の往復運動とみなし, 「imperium すなわち統治術」の要素の肥大化の兆候にマキアヴェッリの「近代性」を指摘した命題は, 「帝國的拡大の契機」を最重要論題に押し上げることなくとも完全に構成可能であることが銘記されるべきである。というのも

「マキアヴェッリのローマ〔共和政〕」は、「維持の政治」としての「ordini」を遵守することによってのみ長久の自由を守護しようのではなかった。抗いがたき諸徳の腐敗、さらには法規範の弛緩への傾向性を掃討すべき「創設の政治」としての「imperium」への回帰が随時要請されるのであり、したがってこの論理を具現する人格、すなわち都市創建の原始にあって僭主的権力を行使した「新しい君主」の拭いがたき残像が、「共和国」を存立せしめる「ordini」の随所に漂わずにはいないのである (51 頁)⁹⁾。共和政体にあっても看取しうる「imperium」の遍在に、「〔近代的〕集権的国内統治」の最初期の萌芽をみとめることは、確かに可能であるだろう。『拡大的共和国』全篇は、かかる厚見氏の研究履歴の初期段階に遡りうる立論の下地に、これと必ずしも矛盾をきたすことはないものの、疑いなく別系統の立論、つまりは「集権的国内統治」を「帝國的拡大」のための「動員」と再解釈する立論が、事後的に編み込まれ、追加された構造をなすものと推定しうる。『拡大的共和国』の論述中に認識される 2 系統の立論の混在こそが、安易な接近をゆるさぬ同著作の体裁、その全体像の把握に要求される若干の精神的緊張の最たる要因であると思われる。ここにおいて、厚見氏が自身の研究の「企図」の所在を表明するにあたり、「『歴史的に正確なマキアヴェッリ自身の意図』を抽出すること」ではなく (14 頁)、『マキアヴェッリ的なもの』の通時的観念史の原点としてのマキアヴェッリ像を描くこと (17 頁) に存すると明言していたことが想起されるべきである。すなわち厚見氏は、「マキアヴェッリ的なもの」の「近代性」に留意しつつ「通時的観念史」を探索した結果、研究の最終段階において、「帝國的拡大の契機」に「集権的国内統治の契機」以上の「現代的意義のみならず思想史的意義」 (16 頁) を見出すに至ったものと考えられる。換言するならば厚見氏は、「帝國的拡大」を「集権的国内統治」以上に適切な「近代性」の指標と解するに至ったがゆえに、「近代的」と「拡大的」とを等号で連結したものと推察しうるのである。

「共和主義の近代化を測る指標」として「帝國的拡大の志向性の強度」を明示的に採用した最初の論稿であり、その諸論述が『拡大的共和国』第

3 部第 7 章の枢要部分に組み込まれている「マキアヴェッリはどこまで古典的共和主義者か」中に、「マキアヴェッリ・テーゼ」と題された一章節が存在する。当該箇所にて確認されるところによるならば、古典的・中世的階層秩序観の崩壊と、これに伴う「自足の不可能性」を前提とするマキアヴェッリの「世界観」にあっては、「維持ではなく拡大を通じてでなければ衰退を避けることはできない」 (290 頁) がゆえに、「帝國的拡大と共和主義的自由との必然的共存」 (291 頁) が生じるのであった。しかるに、ここにおいて即座にマキアヴェッリは、「流転の必然性」 (293 頁) に迫られた軍事的拡大政策こそが、やがてはローマ共和国の自由を侵食し、遂にはこれを消散せしめた旨を主張せずにはいなかったのである。「……軍事的拡大は貴族から平民にいたるまで勇気の物欲化と僭主の登場を促し、結果的にはあらゆる国家の自由は喪失せざるをえないことを、〔マキアヴェッリは〕主張するに至る」 (同)。かくして厚見氏により導出される「マキアヴェッリ・テーゼ」とは、「対内的自由と対外的拡大とは短期的には両立する……が長期的には両立しない」という命題を指す (294 頁)。「マキアヴェッリ・テーゼ」によって厚見氏は、「流転の必然性」と「拡大的共和国」との特殊近代的な結合の性格を明らかにしているものであり、それゆえに同命題は、『マキアヴェッリ的なもの』の通時的観念史上に確たる重大性を付与されたものと思われる。すなわち「……16 世紀のマキアヴェッリ・テーゼは、17 世紀には『共和国はいかなるタイプの拡大を目指すべきか』という問いのかたちで、そして 18 世紀には『共和国は小規模でしか実現できないのか』という問いのかたちで、後の共和主義者たちの議論に大きな影響を及ぼすことになる」 (同)。

最終的に『拡大的共和国』は、「近代的」な「流転の必然性」によって与えられる「拡大」への志向性のみならず、やがては「拡大」によって招かれる破局への傾向性を兼備する点に、「マキアヴェッリのローマ」の「近代性」を見出したものと推察される。しかるに厚見氏は、マキアヴェッリ共和主義の「文脈」を精査した先行諸研究の成果の十全なる吸収ゆえに、さらには古典的政治思想に関するその該博な知識ゆえに、かかる自身の論鋒の貫徹を躊躇しているのではあるまいか。

『拡大的共和国』は、「リクルゴスの調和的立法によって安定と自由を保障されたスパルタ」に対する「騒乱の・拡大型のローマ」の優越を論じた『リウィウス論』第1巻第6章における名高い議論を、「ポリビオスからの継承」とみなしている(293頁脚注)。同第1巻第6章においてマキアヴェッリは、「自足の不可能性」を前提とする自身の「世界観」に則り、軍事的拡大をもって「流転の必然性」に相対的安定を建設する政策を勧説しているのである。さらに厚見氏は、「マキアヴェッリ・テーゼ」を論じるにあたり、「流転の必然性」と「拡大的共和国」の関係についてのマキアヴェッリの洞察が、古代文献『カティリナ戦記(Bellum Catilinae)』からの「継承」であることをみとめている。「拡大の栄誉と共和主義的自由を同一視するマキアヴェッリの立場は、初期近代ヨーロッパにおいて最も著名であった古代の歴史家のひとり、サルスティウスから継承されたものである。……しかしサルスティウスは、ローマ共和国の拡大が自由から生じたことを主張すると同時に、まさにその拡大が共和国と市民の自由を失わせることになったと主張する」(292頁)。『デイスコルシ』第1巻第6章の記述内容と古代文献との類縁性が指摘され、さらには「マキアヴェッリ・テーゼ」が同時に「サルスティウス・テーゼ」と呼称されうる余地が残存することにより、「近代の必然性」なる術語は空洞化し、「帝國的拡大」を「マキアヴェッリのローマ」の「近代性」を示す最たる指標と解する根本前提が動揺をきたしているように思われる。マキアヴェッリ共和主義の「近代性」を画然と分節化すべき厚見氏の筆鋒が、したがって極度に鈍磨されることは不可避であるように思われるのである。『拡大的共和国』中に論じられる膨大な問題群の背後にあって、諸々の古代文献に関する深甚なる学識と、マキアヴェッリ解釈史における汗牛充棟の研究書の丹念な読解に裏付けられた論題群の背後にあって、ついには確たる稜郭を欠いたかに思われる至極単純な問題を、ここにおいて再度提起することも無駄ではあるまい。すなわち、「マキアヴェッリのローマ」の「近代性」は何処に存するのか。

2.2. 喜劇作品の不在について

『拡大的共和国』は、「主要四著作」に研究テク

ストを限定する旨の控えめな言明(22頁)にもかかわらず、実際には書記官時代の政治小論、公私の書簡、そして風刺詩等々、マキアヴェッリ全集の概ね全分野を網羅した研究をおこなっている。しかしながら喜劇作品に関しては、ハーヴェイ・マンズフィールドによる『マンドラーゴラ』解釈を紹介した脚注一箇所(392頁)で言及するのみである。その晩年に執筆された一書簡において、元フィレンツェ共和国書記官が自身を「歴史家(historico)、喜劇作家(comico)、悲劇作家(tragico)」(1525年10月21日付フランチェスコ・グイッチアルディーニ宛書簡)と規定していた事実が想起されるべきであるのかもしれない。『君主論』および『デイスコルシ』の著者を、「喜劇作家」あるいは「悲劇作家」と理解することは、これを本質的に「詩人」と理解する解釈⁽⁹⁾に与することを必ずしも意味するわけではない。というのも「喜劇作家」および「悲劇作家」の政治哲学上の含意が、既にプラトン『法律』中、「アテナイからの客人」の発話(816D-817C)によって示唆されているのである。「……醜い身体や考え……そして言葉や歌や踊りやそれらすべてが持つ、物真似的要素によってつくりだされた喜劇的素材……。……そのような物真似は奴隷や外国人にさせるべきであって、このようなことは何であれ、けっして真剣になってはいけません。自由民は誰でも、女であれ、男であれ、それを学んでいるのを見られてはならないのです。……しかし世に言うところの真面目な作者、つまり、わたしたちの悲劇の作者については……。……『おお異国の人びとのなかでも最も優れた方々〔異国の悲劇の作者たち〕よ。わたしたちは自分たち自身が悲劇の作者であり、しかもできるかぎりもっとも美しく、もっとも優れた悲劇の作者なのです。たしかに、わたしたちの全国家体制は、もっとも美しく、もっとも優れた人生の似姿として構成されたものであり、そしてこれこそまことに、もっとも真実な悲劇であると、わたしたちは主張します。ですから、あなた方が作者であり、しかも、もっとも美しいドラマの製作者かつ役者として、わたしたちはあなた方の競争相手なのです……。』」⁽¹⁰⁾すなわち「真面目な作者」としての「悲劇作家」の政治哲学上の含意が、「国家体制」の運営に参画し、「異国の悲劇作者」との競合関係にある「自由民」

であるならば、「喜劇作家」の政治哲学上の含意は、かかる「悲劇」の営為を侵食し、「国家体制」における慣習の秩序を溶解せしめ、ついには階級と民族を隔てる障壁を損壊するに至りうる「奴隷」と「外国人」である。

厚見氏によって叙述される「マキアヴェッリのローマ〔共和政〕」は、「帝國的拡大の志向性の強度」によって、さらには「拡大」に資するべき「動員」と解された「権力的・統治的要素」の増大によって、その「近代性」の徽章を刻印されるという。しかしながら「動員」を伴う「拡大」の実践そのものは、史実上のローマ共和国や古典期ギリシア諸都市にまで遡りうることは疑いなく、おそらくは人類の政治生活の歴史と同程度に古い。かかる「悲劇的」、あまりに「悲劇的」なる太古の実践の「強度」、つまりは「程度」の微細な差異に専ら留意して「近代性」を把握せんとするがゆえに、厚見氏の「近代性＝拡大的共和国」に関する立論は、イタリア・ルネサンス期の「文脈」を探索し、あるいは古代文献を精査するほどに、甚だ曖昧模糊とした性格を帯びずにはいないのである。厚見氏は「内政の自由と外政の拡大を不可分とする帝國的共和主義の伝統」が14世紀中葉のフィレンツェ人文主義に遡及されうることをみとめ、マキアヴェッリのローマ史解釈とポリビオス、あるいはサルスティウスの論述との親近性を指摘する。膨大な影響史に関する諸々の研究成果が詳論されるに依りて、マキアヴェッリの「近代性」は広漠たる「文脈」の大海に沈降せずにはいないのである。しかるに「マキアヴェッリのローマ」は、「自由民」として自身の「魂 (anima)」にもまして自身の「祖国 (patria)」を愛慕するがごとき「悲劇的」なる契機のみならず、むしろ「奴隷」と「外国人」への親和性を有し、したがって「祖国」の偏狭なる束縛を不断に侵犯する契機をも兼備しているように思われる。『拡大的共和国』における喜劇作品の欠如は、かかる「喜劇的」な契機に対する厚見氏の軽視を、はからずも表現しているのかもしれない。あるいはマキアヴェッリの「喜劇作者」の側面は、その「悲劇作者」の側面にもまして、その比類なき「近代性」の適切な指標と推定しうるのである。というのもレオ・シュトラウスは、『マキアヴェッリ論考』中、「喜劇作者」たることが「マキアヴェッリの

意図の本質」である可能性を指摘していたのである。「あらゆる完全な社会は、必然的に、それを笑うことが絶対に禁じられる何ものかを認識しているということが真実であるならば、この禁忌を犯す決意こそが……マキアヴェッリの意図の本質であると、我々は理解することができるのかもしれない。」⁽¹²⁾

2.3. 「近代性」と「普遍均質国家」について

シュトラウスの論稿「近代性の三つの波」⁽¹³⁾は、古典古代と聖書の「偉大な伝統」からの離脱を遂げ、その根本性格を次第に顕在化する「近代政治哲学」の概略的通史を描いている。同論稿中、マキアヴェッリは「近代性の第一の波」の発動者、すなわち「近代政治哲学」の創設者と規定される。したがってシュトラウスが「マキアヴェッリの意図の本質」について語るとき、「近代性」あるいは「近代政治哲学」の根本性格が問題とされているものと推察することができる。ここにおいて、シュトラウスがロシア出身のヘーゲル解釈者アレクサンドル・コジェーヴの「歴史の終焉」に関する立論に「近代性」の究極の帰結を見出していたことを銘記すべきである⁽¹⁴⁾。クセノフォンの対話篇『ヒエロン』をめぐるコジェーヴとの論争を通じ、シュトラウスは「近代性」に関する自身の洞察に精錬を施していたのであり、その諸々の成果は『マキアヴェッリ論考』の論述の基幹部分を規定するものと想定しうるのである。極めて異様な『精神現象学』の読解に拠りつつ⁽¹⁵⁾、コジェーヴは「主人と奴隷の弁証法」としての「歴史」が究極的綜合に達した際に出現する「普遍均質国家 (universal and homogeneous state)」の可能性について論述していた。そこにおいては、人類の「歴史」の基本的条件なす諸々の「特殊な社会」の割拠状態が克服され、すべての人間は「ホモサピエンスという種」としての「公民」に解消される。かくして「人間としての尊厳」が普遍的に「承認」され、「機会の平等」は完全に保障されるがゆえに、「諸々の基本原則に関する普遍的な合意」が成立し、もはや「歴史後」の秩序を戦争あるいは革命をもって「否定」するいかなる適切な理由も存在しない。アレクサンドロス東方帝国は、諸民族の混交を促進した点において「普遍的」であった。使徒パウロによって構想された統

一体は、諸階級の混交を前提とする点において「均質的」であった。しかるに「歴史の終焉」において「実現」する前例なき秩序は、両者の本質を具有するがゆえに、「普遍均質国家」と形容されねばならないのである。驚くべきことにコジェーヴは、1806年におけるヘーゲルの発言の正しさを確認しつつ、かかる「普遍均質国家」の「実現」は既に「イエナの戦い」において保障されていたと主張するのである。すなわち、これ以後に生じたすべての事象は、「普遍的な革命の威力が空間において拡大したもの」であるにすぎない。「……二つの世界大戦は、それに至る大小の革命も含め、結果としては……最も進んだヨーロッパの歴史的位置に周辺地域の遅れた文明を並べただけであった。」¹⁰⁶幾多の留保にもかかわらず、シュトラウスはコジェーヴによって描写される「普遍均質国家」の創生を、確かに「近代性」の昂進の最終的帰結とみなしていたものと思われる。換言するならば、かかる「喜劇的」、あまりに「喜劇的」なる志向性を、「近代性」の始原に立つマキアヴェッリの「意図の本質」とみなしていたものと思われるのである。

「マキアヴェッリのローマ〔共和政〕」は、「拡大」の過程における移民流入および植民活動の奨励の意義を過度に強調するのであり、したがってローマ市と諸々の同盟市、あるいはイタリア半島と諸々の属州の本質的主従関係の解消を予見させる解釈が施されている点において、「普遍的」である。「マキアヴェッリのローマ」は、古典古代における共和政体の「政治的自由」の欠くべからざる基本的前提をなした「奴隷」の存在をほぼ完全に無視する点において、「均質的」である。世界帝国の建設の結果として生じるであろう事態が、あたかもローマ共和国市民による帝国建設の原因であるかのごとく語られているのである¹⁰⁷。「帝國的拡大の志向性の強度」それ自体ではなく、その「普遍的」にして「均質的」なる性格、いとも「喜劇的」なる性格によって、「マキアヴェッリのローマ」は歴史上のローマ共和国の甚だ極端な戯画へと変態を遂げることになる。悠遠の原古より人類の政治生活の本質を規定した「悲劇的」なる志向性からは截然と区別されるべき志向性、かかる「喜劇的」、あまりに「喜劇的」なる志向性に留意するならば、「マキアヴェッリのローマ」の

比類なき新しさ、すなわちその「近代性」の画然たる分節化が可能となるであろう。というのもシュトラウスとコジェーヴの双方が一致してみとめたように、「近代政治哲学」のみならず、近現代の政治的实践ですらも、「普遍的」にして「均質的」なる秩序の観念を究極の導きの星とする本質的に「喜劇的」な営為であったことは、ほとんど明らかであるように思われるのである。

『拡大的共和国』中、厚見氏の観察は、概してマキアヴェッリ政治思想の「悲劇的」なる側面に集中している。「マキアヴェッリのローマ」の「近代性」の所在を探求するに際しては、むしろ「喜劇作者」としてのマキアヴェッリの姿態を観察すべきであったはずではあるまいか。しかるに、いかほど近現代世界の「喜劇的」なる根本性格が明白であろうとも、「奴隷」や「外国人」ならざる「悲劇作者」の営為が遂には古物蒐集家の愛玩の対象に墮するわけではない。フリードリヒ・ニーチェ『悦ばしき知識』中の秀逸なる断章が予告していたように、「喜劇作者」の渦巻く哄笑が惑星に遍く浸透する事態が生じるに際しては、必ずや怒れる「悲劇作者」の蜂起が準備されるであろう。「……当分はあいもかわらず悲劇の時代、道徳と宗教の時代なのだ。道徳や宗教のあの創設者たち、倫理的評価をめぐる闘いのあの張本人たち、良心の呵責と宗教戦争とのあの教師たち……。これらの悲劇役者もまた、生への信仰を促進することによって種族の生命を促進する。『生きるのは価値あることだ』——そう彼らの誰もが叫ぶ……。こうして、必然的にかつ常に自発的に一切の目的なしにおこなわれることが、今後はある目的を目指しておこなわれたかのように受理されてゆく——そのためにとて倫理の先生が、『生存の目的の教師』として登場するわけだ。……。だが今までのところ結局はこれら偉大な目的の教師たちのいかなる者も笑いと理性と自然との支配に屈してしまったことは否定されるべくもない。そして『数しれぬ笑いの波』——アイスキュロスの言葉を借りて言えば——がついにはこれら悲劇の最大のものの上にも襲いかぶさってゆくにちがいない。……。だがしかし……。くりかえしくりかえし時として人類は布告を発するであろう——『絶対にもはや笑うことのゆるされぬ何ものがある！』と。」

(10)

「悲劇」と「喜劇」の対立に関してプラトンとニーチェが抱懐した恒久的問題を、確かにマキアヴェッリもまた体現していたものと思われる。その蓋世の天稟は、「喜劇作者」であったと同時に「悲劇作者」たりえたことに存する。マキアヴェッリが「近代性の波」の発動者となった最たる理由は「喜劇作者」としての半身にもとめられるがゆえに、そして「近代性」の赫々たる勝利に疑念を差し挟むことが至極困難と思われるがゆえに、「近代性」の対蹠地を探索すべく、いまや再び元フィレンツェ共和国書記官の「悲劇的」なる半身に宿る可能性に最大限の注意が払われるべき時期が満ちつつあるのかもしれない。いとも「喜劇的」、あまりに「喜劇的」なる「奴隷」と「外国人」の忌むべき醜態、もはや何らの新奇さもなければ、甚だ退屈な惰性を帯びるに至り、ほとんど失笑を誘う道化の端唄に下されるべき筆誅は、人類最古の旋律たる悲歌として、あくまで「悲劇的」たらねばならないのである。適切にも『拡大的共和国』によって指摘されるように、マキアヴェッリ政治思想は「偉大 (gloria = grandezza)」に枢要の価値をみとめていた (173 頁, 271 頁)。かかる価値を貫徹し、これに忠実たるためには、純然たる「喜劇作者」の姿態を放棄せねばならないことを、不覚にもマキアヴェッリが看過していたとは到底信じがたい。というのも、かの 20 世紀に不断の polemique を喚起した命題は、確かにひとつの真理であったように思われるからである。すなわち、「すべて偉大なるものは嵐のさなかに立つ」 »Alles Große steht im Sturm«⁽¹⁹⁾。

『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』は、とりわけアングロ・サクソン圏におけるマキアヴェッリ研究が甚大なる進歩を遂げた 20 世紀最後の四半世紀の諸々の成果を十全に咀嚼した、我が国最初の本格的な研究書である。その犀利なる原典読解と圧倒的分量の二次文献の精査ゆえに、同書が以後数十年にわたり後学の士の亀鑑として、常時その座右を占めることは必定であるだろう。しかるに厚見氏は、これをもって「一応の区切り」とみなすものの、「マキアヴェッリ研究においてはまだまだ書かれるべきことが多く残っていること」を確認しつつ、この大著を結ぶのであった (435 頁)。さ

らなる厚見氏による研究成果の公刊が刮目して待たれる所以である。「おおくの点では、貴兄ほど私とおおくの前提をおなじくしている人を他に知りません。貴兄は私とおなじ問題を認めておいでのようですし、またおなじと思われるような問題を私と似た仕方でも御研究のようです。いや、貴兄は、いっそう口数の少ない方ですので、きっと私よりも遥かにしっかりと深く研究なさっていらっしゃるのでしょう。その点、私はまだ若造です……。」⁽²⁰⁾

[注]

- (1) 厚見恵一郎『マキアヴェッリの拡大的共和国——近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』木鐸社, 2007 年。以下、『拡大的共和国』と略記する。本文および注記における () 内の頁番号は、特にことわりがない場合、同著作の頁番号である。
- (2) 藤原保信・飯島昇藏編『西洋政治思想史 I』新評論, 1995 年, 110-125 頁。
- (3) Anthony J. Parel, *The Machiavellian Cosmos*, Yale University Press, 1992. 厚見氏は同著作の先駆的性格を極めて高く評価している (71 頁)。
- (4) Leo Strauss, *Thoughts on Machiavelli*, The University of Chicago Press, 1958. 同著作は『拡大的共和国』中、厚見氏によって最も高い評価を与えられている現代の研究書である。「マキアヴェッリの近代性を、『君主論』だけでなく『リウィウス論』にも依拠して解明した研究のうち、その近代分析の鋭さとマキアヴェッリ読解の緻密さとの稀有な結合において未だに他の類をみない研究書が、シュトラウスの『マキアヴェッリ論考』……である」(37 頁)。なお、マキアヴェッリを「哲学者」とみなすシュトラウスの根拠については、村田玲「レオ・シュトラウス『マキアヴェッリ論考』読解の諸前提に関する試論 (下)」『政治哲学』第 5 号, 政治哲学研究会, 2007 年, 55 頁を参照せよ。
- (5) 同様の言明として、「……共和政論の関心は結局のところ、スタート論に収斂してゆくのである」(佐々木毅「マキアヴェッリの社会思想」上智大学中世思想研究所編『中世の社会思想』創文社, 1996 年, 339 頁)。
- (6) 「……佐々木氏によれば、マキアヴェッリにおける自国軍の擁護と共和国論は、マキアヴェッリの原理的人間論およびそこから引き出された“stato”的な原理的政治観と矛盾することになり、それはマキアヴェッリ政治思想の挫折であり破綻である。しかし私見によれば、傭兵制に代わるその自国軍の主張や共和国の擁護そのものがむしろマキアヴェッリの政治理論の本質的——そして原理的ともいうべき——側面を表現している」

- (藤原保信「マキアヴェリ」中金聡・厚見恵一郎編『藤原保信著作集3・西洋政治理論史(上)』新評論, 2005年, 221頁)。さらに次の言明に注目せよ。「……基本的なマキアヴェリ解釈においては、わたくしはむしろ柴山英一『マキアヴェリの歴史的研究序説』……に賛成する」(同, 245頁)。なお、柴山英一氏による研究は「彼〔マキアヴェッリ〕の本領とするアイデアリストとしての共和思想」に着目したものであった。「……いわゆるマキアヴェリズムの克服を熱望する人物は外ならぬアイデアリストたる彼〔マキアヴェッリ〕自身……」(柴山英一『マキアヴェリの歴史的研究序説』風間書房, 1969年, 18頁)。
- (7) とりわけ Leo Strauss, *Gesammelte Schriften, Band 3, Hobbes' politische Wissenschaft und zugehörige Schriften - Briefe*, herausgegeben von Heinrich und Wiebke Meier, Verlag J. B. Metzler, 2001, SS. 82-126. (添谷育志・谷喬夫・飯島昇藏訳『ホッブズの政治学』みすず書房, 1990年, 104-135頁)の論述に着目せよ。
- (8) 「斯界のオーソリティたちはみなわたくしに、マキアヴェッリの主著 *magnum opus* は『君主論』ではなく『ディスコルシ〔リウィウス論〕』である、と断言した」*Ibid.*, S.10 (邦訳 x vii頁)。
- (9) なお、「創設の政治」と「維持の政治」なる言辞に関しては、厚見氏は中金聡「政治とは何か」押村高・添谷育志編『アクセス・政治哲学』日本経済評論社, 2003年, 28-30頁の論述に依拠している。
- (10) 若干の例を挙げるならば、「……マキアヴェッリは詩人である」Roberto Ridolfi, *Vita di Niccolò Machiavelli*, Settima edizione italiana accresciuta e riveduta, Sansoni, 1978, p.vII. (須藤祐考訳「マキアヴェッリの生涯(一)」『愛知大法経論集』第151号, 1999年, 194頁)。「……ニココロが自分のことを詩人だと思っているのも驚くには当たらない」(ロジャー・D・マスターズ『ダ・ヴィンチとマキアヴェッリ——幻のフィレンツェ海港化計画』常田景子訳, 朝日新聞社, 2000年, 75頁)。「マキアヴェリは自分を詩人だと思っていた……」(澤井繁男『マキアヴェリ, イタリアを憂う』講談社, 2003年, 204頁)。
- (11) プラトン『法律(下)』森進一・池田美恵・加来彰俊訳, 岩波書店, 1993年, 86-88頁。なお次の逸話は、「悲劇」と「哲学」との関係を示唆するものとして興味深い。「……悲劇によって賞を競おうとしていたとき、彼はディオニュソス劇場の前でソクラテスに諫められ、詩の作品を火中に投じて、こう言った。……プラトンはいまだたを必要としているのです」(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(上)』加来彰俊訳, 岩波書店, 1984年, 252-253頁)。
- (12) Strauss, 1958, p.40.
- (13) Leo Strauss, "The Three Waves of Modernity," *An Introduction to Political Philosophy, Ten Essays* by Leo Strauss, ed., Hilail Gildin, Wayne State University Press, 1989, pp.81-98. (石崎嘉彦訳「近代性の三つの波」『政治哲学』第1号, レオ・シュトラウス政治哲学研究会, 2002年, 3-21頁)。
- (14) シュトラウスとコジェーヴの論争については、以下を参照せよ。Leo Strauss, *On Tyranny*, Revised and Expanded Edition, Including the Strauss- Correspondence, ed., Victor Gourevitch and Michael S. Roth, University of Chicago Press, 1991. (石崎嘉彦・飯島昇藏・面一也訳『僭主政治について(上)』現代思潮新社, 2006年, 石崎嘉彦・飯島昇藏・金田耕一訳『僭主政治について(下)』現代思潮新社, 2007年, および村田玲「レオ・シュトラウス『マキアヴェッリ論考』読解の諸前提に関する試論(上)」『政治哲学』第4号, 政治哲学研究会, 2006年)。
- (15) Alexandre Kojève, *Introduction to the Reading of Hegel: Lectures on the Phenomenology of Spirit*, ed., Allan Bloom, trans., James H. Nichols, Jr., Cornell University Press, 1969. (上妻精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門——「精神現象学」を読む』国文社, 1987年)。さらに、金田耕一「A・コジェーヴ——闘争・労働・死」飯島昇藏編『両大戦間期の政治思想』新評論, 1998年, 208-234頁を参照せよ。
- (16) 『ヘーゲル読解入門』第2版に付されたコジェーヴの論述(Kojève, 1969, pp.159-162(邦訳245-247頁))に注目せよ。
- (17) 移民の流入に関しては、とくに『リウィウス論』第2巻第3章の論述を参照せよ。さらに同章について論じた以下の陳述に注目せよ。「……際限なき帝国主義は普遍的な愛へと通じる。……帝国主義がコスモポリタニズムへと解消するのみならず、対外政策は対内政策と同一となる。というのも普遍的な愛は、帝国主義と同様に、内部の事柄を外部の事柄から区別する諸々の政治的境界のすべてを克服することにおいて示されるからである」(Harvey C. Mansfield, *Machiavelli's new modes and orders: a study of the Discourses on Livy*, The University of Chicago Press, p.198.)。かかる「帝國的拡大」に対するマキアヴェッリのアンビヴァレントな態度については、Strauss, 1958, p.118の論述、および村田玲「道徳の自然誌——マキアヴェッリ政治学の道徳的基礎に関する予備的諸考察(下)」『早稲田政治公法研究』第85号, 2007年, 53-59頁, を参照せよ。なお「奴隷の不在」に関しては、『拡大的共和国』中にも次のような指摘がある。「14世紀中葉から16世紀初頭のイタリア都市共和国という経験のユニークさは、それが奴隷をもたずに政治的自由を達成したということである。……国富(領土)の維持や拡大が、(奴隷という恣意的支配からの)共和主義的自由によって促進される、ということを発見したことが、イタリア、とりわけマキアヴェッリの拡大的共和国主義の特徴であった」(286-287頁)。

- (18) 信太正三訳『悦ばしき知識 (ニーチェ全集 8)』筑摩書房, 1993 年, 57-59 頁。
- (19) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität*, Korn Verlag, 1934, S.22. (管谷規矩雄・矢代梓訳「ドイツ的大学の自己主張」清水多吉・手川誠士郎編訳『30 年代の危機と哲学』平凡社, 1999 年, 120 頁)。
- (20) 1886 年 9 月 22 日付ジルス・マリーア宛ヤーコプ・ブルクハルト宛フリードリヒ・ニーチェ書簡 (堀越敏・中島義生訳『ニーチェ書簡集 II・詩集 (ニーチェ全集・別巻 2)』筑摩書房, 1994 年, 76 頁)。